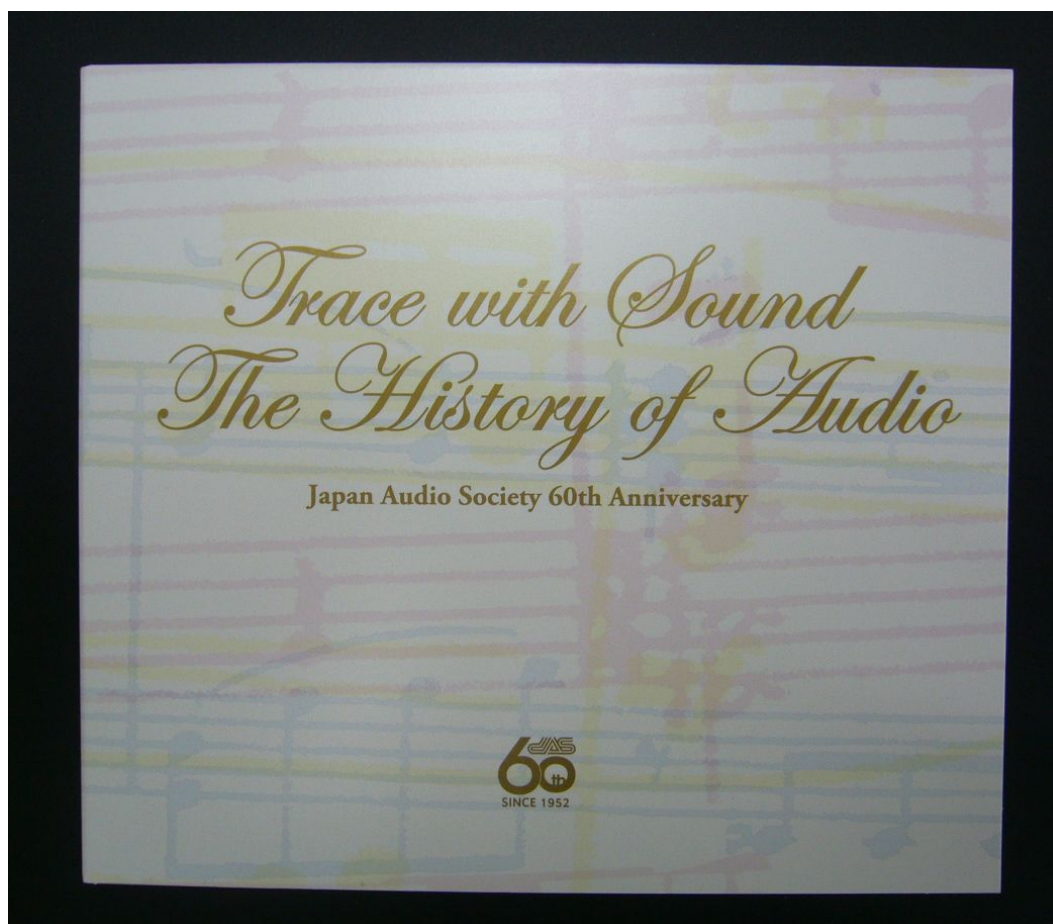


日本オーディオ協会創立 60 周年記念 CD  
「音で辿るオーディオの世紀」解説書



昨年、創立 60 周年を迎えた日本オーディオ協会は、その記念事業の一つとして 60 周年記念の CD「音で辿るオーディオの世紀」を制作、会員の皆様に配布いたしました。収録内容につきましては、50 周年記念に配布した記念 CD を基に、60 周年記念行事委員会で取捨選択し、さらに日本プロ音楽録音賞受賞作品につきましても第 18 回まで、代表的な作品を各年 1 点収録してあります。

お手元にお届けいたしました CD には曲のタイトル・収録時間しか記載されていません。そこで、この CD の簡単な解説をまとめ、JAS ジャーナル 3 月号の特別付録とさせていただきます。会員の皆様がこの貴重な音源で、オーディオの歴史を辿って頂ければ幸いです。

〈レコードの発明と蓄音機〉

01. メリーさんの羊：エジソンの肉声（フォノグラフ発明10周年記念の録音） 0:09
02. きらきら星：ベルリナーの肉声（史上初の円盤録音） 0:30
03. 高砂：梅若萬三郎（日本における初の録音） 1:21
04. ヴェルディ イル・トロヴァトーレ第4幕：エンリコ・カルーソー（HMV 202による演奏） 1:58
05. イン・ザ・ムード：グレン・ミラー オーケストラ（ビクトロラ クレデンザによる演奏） 1:31

〈レコーディング技術の発展〉

06. 井深氏・盛田氏のスピーチ（国産初のテープレコーダー、ソニーG型使用） 0:59
07. 三木鶏郎作「日曜楽版」より（NHK昭和26年9月放送）、収録にソニーG型使用 2:30
08. ベートーベン 交響曲第9番：ブルーノ・ワルター／ニューヨークフィル（国産初のLP） 1:07
09. 越後獅子：芳村伊十郎（国内録音初のLP） 1:39
10. ブルー・カナリー：ダイナ・ショア（国産初のEP） 1:12
11. モッキンバード・ヒル：レス・ポール（テープ多重録音） 1:20
12. コダーイ 無伴奏チェロソナタ：ヤーノシュ・シュタルケル（モノLP時代の名録音） 1:23
13. ムソルグスキー 展覧会の絵：クーベリック／シカゴ交響楽団（モノLP時代の名録音） 1:09
14. OPUS DE JAZZ：ミルト・ジャクソン（モノLP時代の名録音） 1:25

〈オーディオの広がり〉

15. モーツァルト 交響曲第41番：ビーチャム／ロンドンフィル（世界初のステレオ録音） 0:46
16. 蒸気機関車（ステレオデモンストレーション） 1:02
17. 立体音楽堂（NHKのステレオ放送） 2:02
18. 音のシネラマ：ナショナルステレオホール（民放2局によるステレオ放送） 1:03
19. チャイコフスキー ピアノ協奏曲第1番：エミール・ギレリス／ライナー（国産初のステレオLP） 1:11
20. ワグナー ラインの黄金第4場：ショルティ／ウィーンフィル（ステレオLP時代の名録音） 1:06
21. マラー 交響曲第2番：ショルティ／ロンドン（ドルビーNR録音） 1:45
22. エル・チャクロ：キントレ・レアル（世界初ダイレクトカッティング） 1:35
23. 雨にぬれても：カウントバッファロービッグバンド（ステレオLP時代の名録音） 1:26
24. 時計屋の店先（バイノーラル） 1:03
25. アラベスク第1番：富田 勲（シンセサイザー） 1:22
26. モーツァルト 弦楽四重奏曲第17番：スメタナ弦楽四重奏団（世界初PCM録音LP） 1:24
27. テクノポリス：イエロー・マジック・オーケストラ（デジタルマルチトラック録音） 1:37

〈CDの誕生〉

28. さらばシベリア鉄道：大瀧詠一（世界初のCD） 1:46
29. チャイコフスキー 序曲1812年：カンゼン／シンシナティ交響楽団（デジタル時代の名録音） 1:22
30. マラー 交響曲第4番：インバル／フランクフルトRSO（デジタル時代の名録音） 1:58
31. マラー 少年の魔法の角笛：フィッシャー・ディースカウ／バレンボイム（世界初の20ビット録音CD） 1:10
32. ディスピア：トニー・ウィリアムス・トリオ（世界初の1ビット録音CD） 1:41

〈日本プロ音楽録音賞〉

33. ドヴォルザーク 交響曲第9番：ノイマン／チェコ・フィル（第1回） 1:26
34. Because：白鳥英美子（第2回） 1:26
35. パケーション：飯島真理（第3回） 1:26
36. Edge of Sky：吉川忠英（第4回） 1:26
37. 霧と話した：中丸三千絵（第5回） 1:24
38. 蜘蛛の糸：本名謙次（第6回） 1:26
39. Turning of the Dream：本田雅人（第7回） 1:26
40. 道化師の朝の歌：パーカッション・ミュージアム（第8回） 1:26
41. Fantasma II：沖 仁（第9回） 1:26
42. 波：長谷川京子、福田進一（第10回） 1:26
43. VIEWS：角松敏生（第11回） 1:26
44. R. コルサコフ シェラザード：シェラザード・フィルハーモニー交響楽団（第12回） 1:26
45. after six pm：パリスマッテ（第13回） 1:26
46. オーボエ協奏曲：宮本文昭／東京交響楽団（第14回） 1:26
47. Frame for the Blues：Eric Miyashiro（第15回） 1:26
48. Meteor：渡辺香津美（第16回） 1:26
49. オールオブミー：角田健一ビッグバンド（第17回） 1:26
50. マラー 交響曲第2番：インバル／東京都交響楽団（第18回） 1:26

60周年記念CD スタッフ/協力会社者一覧

（企画委員） 校條亮治/森芳久/穴澤健明/倉持誠一/鈴木順三/畑陽一郎/植賀哲夫/渡辺隆志

（制作協力） 音源提供

株式会社EMIミュージック・ジャパン/株式会社イーストワークスエンタテインメント/NHK/株式会社オクタヴィア・レコード/金沢蓄音器館/キングレコード株式会社

ソニー株式会社/株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント/有限会社トーン/日本コロムビア株式会社/株式会社ニッポン放送/株式会社パップ

株式会社ビクターエンタテインメント/株式会社ミキサーズラボ/三木鶏郎企画研究所/ユニバーサルミュージック合同会社

株式会社ワーナーミュージック・ジャパン/小川進/SYMPOSIUM Records/Telarc International, a division of Concord Music Group, Inc.

（CD制作） 株式会社ソニー・ミュージックコミュニケーションズ

\*01～32「日本オーディオ協会 50 周年記念 CD より抜粋」(文責：編集委員会)

《レコードの発明と蓄音機》

01. メリーさんの羊：エジソンの肉声（フォノグラフ発明 10 周年記念の録音）

■トーマス・エジソン ■SYMPOSIUM

1877年12月6日、世界初の録音・再生可能な蓄音機「フォノグラフ」が誕生した。発明者は彼のトーマス・エジソン。彼は世界初の録音実験に自らが童謡「メリーさんの羊」の歌詞を朗読した。そのオリジナルは残されていないが、このディスクに記録されたものはフォノグラフ誕生10周年記念にエジソンが再び「メリーさんの羊」を朗読したものである。

02. きらきら星：ベルリナーの肉声（史上初の円盤録音）

■E・ベルリナー ■SYMPOSIUM

1887年9月26日、エミール・ベルリナーが史上初の円盤式蓄音機「グラモフォン」を発明した。彼はその最初の録音実験に童謡「きらきら星」の歌詞を口ずさんだ。彼が幼い頃、音楽の才能に恵まれた母親がよく歌ってくれたもので、母親に対する感謝の念がこめられていたのかもしれない。ここにはそのベルリナーの肉声が記録されている。

03. 全集 日本吹込み事始 謡曲「高砂」梅若 萬三郎（日本おける初の録音）

■東芝 EMI ■TOCF-59061～71 より

日本に録音の足跡をもたらしたドイツ系米国人の英国グラモフォン社録音技師フレデリック・ガイスバークは、1903年2月東京メトロポール・ホテルでベルリナー平円盤レコードによる録音を行った。録音機材は全て英国から運ばれ、ラッパに向かって直接音を入れる機械録音であった。このアーカイブはロンドンの EMI 社にあったもので7インチ盤164枚、10インチ盤109枚に及んでいる(当時は片面のみであった)。

録音した日本音楽は、雅楽、謡曲、狂言、薩摩琵琶、義太夫、常磐津、清元、長唄、俗曲、筑前琵琶、三曲、洋楽(吹奏楽)、新劇、浪曲、声色、落語、詩吟など多数である。CDへの収録時間は647分に及ぶが、当時の10インチ盤の収録時間は2分30秒程度であり、雅楽曲録音の類推をすると3分を超えるものがあって、78回転より遅い録音速度ではなかったのかと言う考察がある(神戸大学 寺内直子氏)。これらの円盤を復刻したものが東芝 EMI から CD(2001年4月11枚組)によってリリースされた。本楽曲は今でも耳にする一曲である。

04. ヴェルディ イル・トロヴァトーレ第4幕より：エンリコ・カルーソー（HMV202による演奏）

■エンリコ・カルーソー ■HMV/DK/119

これはアコースティック蓄音機全盛時代の名機 HMV-202 型による SP の再生音である。HMV(His Master's Voice)社の誇るこのイギリスを代表するこの名機は、ベル研究所の開発したリ・エントラント・ホーンを持つ大型の蓄音機で、伊豆下田市在住の SP 愛好家小川進氏所有のもの。その美しい音色でカルーソーの歌声の魅力を余すところなく表現してくれている。

**05. イン・ザ・ムード：グレン・ミラー オーケストラ（ビクトローラ クレデンザによる演奏）****■グレン・ミラー オーケストラ**

1939年に大ヒットしたグレン・ミラー オーケストラの演奏による SP 盤の再生音。その時代の人がこの SP のヒット盤を聴いたであろう音が聴けたらという要望にこたえて収録したのがこの録音である。この SP 盤が発売されて約 60 年を経た 20 世紀末、金沢蓄音器館所蔵の SP 盤の中から新品同様な盤を選び出し、金沢蓄音器館の所蔵する数多くの蓄音器の中でも名機中の名機と称され、戦前家が 1 軒買えたともいわれるビクトローラ「クレデンザ」で再生した。戦前のマニアが楽しんだ響きの豊かな広い部屋にこの蓄音器を置き、忠実度の高いデンマーク B&K 社のスタジオ用マイク「Type4006」2 本のみを用いてデジタル録音機で収録した。この録音を聴くと、70 年以上前の録音でありながら、とても魅力的な音がし、何の手も加えていないのにノイズが少ないことに皆様も今更ながら感心され、70 年前の人達の心豊かなオーディオ生活に思いを馳せることだろう。

**《レコード技術の発展》****06. 井深氏・盛田氏のスピーチ（国産初のテープレコーダー、ソニーG型使用）**

1949年、日本で初めてのテープレコーダーが完成する。ソニーの前身東京通信工業が成した快挙であった。ここには、創業者の井深、盛田両氏が翌 1950 年のテープレコーダー開発 1 周年記念に録音した貴重な音声記録されている。

**07. 三木鶏郎作「日曜娯楽版」より**

三木鶏郎氏は、第 2 次大戦直後に時の権力者に盲従することなくユーモアにあふれたラジオ番組を制作し続け、その放送が始まると通りから人が消え、聴取率は何と 80%とも 90%ともいわれた。このラジオ番組は「冗談音楽」でまず旋風を巻き起し、「日曜娯楽版」、「ユーモア劇場」へと引き継がれていった。また三木鶏郎氏は諸井三郎氏に作曲を師事し、小野アンナ氏にヴァイオリンを師事するなど本格的な音楽教育を受けた才人でもあった。この番組から河合坊茶氏、丹下キヨ子氏、三木のり平氏、中村メイコ氏などからなる三木鶏郎グループが誕生した。本 CD に収録されている昭和 26 年 9 月のサンフランシスコ講和条約締結 6 周年記念番組が今聞けることについては面白い秘話がある。前トラックの井深・盛田両氏の話に出て来るソニーG型テープレコーダーの完成後、直ちにこれを三木鶏郎氏が購入し、自分の制作した番組の放送をその場で G 型に収録し残してくれたのだ。

**08. ベートーベン 交響曲第 9 番：ブルーノ・ワルター/ニューヨークフィル（国産初の LP）****■ソニー・ミュージックエンタテインメント ■WL-5001/2**

国産初の LP で 1951 年 4 月に日本コロムビアから発売された。金属原盤（メタルマザー）とレコード用ビニール材料を、原盤提携先であり LP の開発会社である米国コロムビアから輸入し、国内でこの原盤からプレス用原盤（スタンパー）をメッキにより作成し、当時の 12 インチ SP 盤用プレス機を改良し輸入材料を用いてプレスした。この時代には音楽の振幅に応じて溝の深さや溝の間隔を調整するヴァリアブルデプスやヴァリアブルピッチがまだ採用されていなかったため、

このLPでは第9に3面要したが、後年ヴァリアブルデプスやヴァリアブルピッチの導入により第9がLPの両面に収録できるようになり話題を呼んだ。この2枚組みの第9の価格は、公務員の月給が5,500円、映画の入場料が90円の時代に、4,600円もし、1万8,000円の新たなプレーヤーも必要とした。それでも高音質、長時間再生、操作性、省スペース、耐久性などに優れていたためLPは数年でSPの王座を奪うことになった。

#### 09. 越後獅子：芳村伊十郎（国内録音初のLP）

■日本コロムビア■BL-5001

国内録音初のLPは、1953年8月に発売されたこのレコードであった。最初のLPが長唄、浪曲、常磐津、雅楽であったのは、いままで連続して全曲が聴けず、3～5分毎にレコードを裏返したり取り替えて聴いていた不満から開放された表れだろう。LPの発展は、テープレコーダーの本格的な発達なしには考えられない。LPの収録時間に見合うだけの連続録音が可能な媒体と、途中の編集が必要だったのである。このLPを発売した日本コロムビアによると、1950年に米国よりテープ録音機を輸入し、12月より録音を開始したと記録にあるが、現在その頃の録音テープは存在していない。この長唄も残念ながら金属原盤はあるが、テープは存在していない。

#### 10. 国産初のEP ブルー・カナリー：ダイナ・ショア（国産初のEP）

■BMG ファンハウス■EP-1001

EP(Extended Playing)レコードは17cm(7inch)/45回転(r.p.m)仕様で、演奏時間がSP(Standard Playing)より長くLP(Long Playing)より短い中間的な存在であり、今のCDシングル盤に相当した。初期のEP盤はセンター・ホールが38.2mmであり、外観が丁度ドーナツに似ていたことからドーナツ盤と呼ばれ、オートチェンジャー(自動演奏装置)用に作られたものであった。LP盤(1948年米コロムビア社)に1年遅れて発売されたEP盤(RCAビクター社)は当初競合関係にあったが、技術的に殆ど同じであったため共存が可能となり、双方の会社が互いの規格を発売し両方が標準化された。そしてポピュラー音楽のヒットソング時代を支えたEP盤の第1号は、このダイナ・ショアのブルー・カナリーである。戦後間もない時期にこの派手やかな歌を聴いてアメリカ文化への憧憬に駆られた諸兄は少なからずいらっしやっただに違いない。

#### 11. モッキンバード・ヒル：レス・ポール（テープ多重録音）

■東芝EMI■CDP7996172

2人だけで演奏したとは思えない効果を、4トラックテープレコーダーを用いて多重録音やピンポン録音によるメリー・フォードの重唱やエレキギターのサウンド・オン・サウンドを実現した録音で、テープレコーダー多重録音黎明期を代表する録音と言えよう。1948年頃ディスク録音機複数台を用いたマルチトラック録音を行なったレス・ポールは、1949年頃アンペックスに依頼しこの録音で用いた4トラックのテープレコーダーが作られ、その後1952年には8トラックのテープレコーダーをアンペックスに作らせている。レス・ポールはエレキギターの開発にも情熱を注ぎ、1934年にソリッドギターを開発し、そのギターは後にギブソン社から発売され、今でもレス・ポールギターとして世界中のギタリストに愛されている。

**12. コダーイ 無伴奏チェロソナタ：ヤーノシュ・シュタルケル（モノ LP 時代の名録音）**

■ポリドール ■SPLP-510

改めてこのレコードを聴きなおしてみると、最近の録音を凌ぐばかりの録音である。未だに音の新鮮さと充実さにおいては、現代の録音には求むべくもない音を再現してくれる。持った手にずっしりとくるレコードの重さを計量すると SPL510 が 220 グラム、SPLP510 が 180 グラムの超重量盤で、LP 初期の盤であることが判る。このピリオド盤には上記のごとく二種類の盤があり、マトリックス番号は共に SPLP510A と B である。A と B の違いは表と裏面の区別である。汗臭いばかりのシュタルケルの演奏と、この録音を担当した大作曲家ベラ・バルトークの息子ピーター・バルトークの気迫が伝わってくる。「松脂の飛び散る音」と称された名盤である。

**13. ムゾルスキー 展覧会の絵：クーベリック/シカゴ交響楽団（モノ LP 時代の名録音）**

■ユニバーサルミュージック ■HB1019

ハイファイ初期の録音で今も記憶に残るのがこの展覧会の絵である。社会主義化したチェコを憂い自由世界から故国に思いをはせるクーベリックの心情を、ダイナミックなシカゴ SO の演奏が応えて余す処がない。マーキュリーのハイファイ・シリーズの第一弾を飾るのに、当を得た組み合わせと言えらるだろう。それにしても現代の最新の録音にこれに匹敵するものを見出すのがなかなか難しい事実を認めざるを得ないのは、一体何を意味しているのだろうか。

**14. OPUS DE JASS：ミルト・ジャクソン（モノ LP 時代の名録音）**

■日本コロムビア ■MG12036

1955 年 10 月 28 日の録音クレジットのあるこのレコードは、Savoy MG12000 番代のジャズの名録音シリーズを世に送り出したオジー・カデナがプロデュースした名盤である。時あたかもモダン・ジャズの夜明け、この時代のジャズの録音にはアンペックスのテープマシーンによるマスタリングとフェアチャイルドあるいはウエストレックスのカッティング・システムが、ダイナミックな録音をジャズ・ファンに提供したと聞いている。

**《オーディオの広がり》****15. モーツァルト 交響曲第 41 番：ビーチャム/ロンドンフィル（世界初のステレオ録音）**

■東芝 EMI ■SYMPOSIUM (1027A~1028B)

1930 年代初頭に英国 EMI は独自の技術による電気録音技術を確立した。その折にステレオ録音まで実現している。このレコードはおそらく EMI に保存されていたであろうその時代の実験的な録音の 10 インチ金属盤によって再現された 12 インチのビニライト盤である。ヒルアンドデイルと呼ばれる縦一横（VL）振動方式のステレオ録音で、SP レコードと同じ音溝の 78 回転レコードである。当時の LSO と若き日のトーマス・ビーチャムが颯爽としてモーツァルトのシンフォニーのリハーサルを振っている風景が目には浮かぶ様である。

**16. 蒸気機関車（ステレオデモンストレーション）**

■東芝 EMI ■LF-90001

蒸気機関車が元気に活躍していた時代の代表的な録音をお聴きいただく。行方洋一氏による三菱鉱業美唄炭坑（現在は廃坑）と現 JR 函館本線美唄駅の間を結ぶ専用線（現在は廃線）での 4110 型石炭列車の通過音の録音である。録音場所は旧常盤台駅付近で線路が大きく湾曲し、複雑な地形と相まってブラスト音の反射による変化が聴きとれる。4110 型蒸気機関車は動輪を 5 個持つスピードは出ないが力のある機関車で、三菱鉱業美唄炭坑以前に奥羽本線の福島～米沢間の難所板谷峠でも活躍した機関車である。録音は 1968 年頃ウーヘル社の 4200 アナログ録音機(19cm/sec)と 2 本の AKG 社の D-202 により行なわれたとのことである。

### 17. NHK の二元立体放送 「立体音楽堂」

■作・伊藤海彦 ■指揮・作曲山田和男 ■アナウンス・後藤美代子 ■語り手・木村 功 ■演奏・東京フィルハーモニー交響楽団 ■合唱・東京放送合唱団、藤原歌劇団合唱部

世界最初のステレオの定時番組「立体音楽堂」の第 1 回が放送される 10 日前の 1954(昭和 29)年 11 月 3 日に放送された第 9 回文部省芸術祭参加番組の冒頭部分である。NHK のラジオ第 1 放送で Lch を、第 2 放送で Rch を流した。更に古い録音も何点が残っているが、レベル調整を兼ねた開始アナウンスは当時生で放送していたため、今は聞くことができない。開始アナウンスが入ったパッケージテープとして NHK に残る最古のステレオ録音である。管弦楽と合唱に語り手やセリフを含み、また技術研究所のボコーダーを使うなど技術的にも最初期とは思えないほど手が掛った作品である。センターのアナウンサーの声は、今日ならマイク 1 本の出力を L、R に分岐するのが一般的で音像定位もよいが、左右に置いた 2 本のマイクで拾っていた。

### 18. 民放二局二元立体放送「音のシネラマ」(民放 2 局によるステレオ放送)

音のシネラマ：ナショナルステレオホール

■提供・ニッポン放送、文化放送 ■BMG ファンハウス、松下電器産業 ■放送日・1961 年 11 月 24 日夜 8 時 ■アナウンス・高岡寮一郎、手塚斐子 ■テーマ曲・ペレス・プラード楽団「花火」

左・文化放送、右・ニッポン放送の AM ステレオ定時番組が、1958 年 9 月 15 日に開始された。この音源『音のシネラマ』『ナショナルステレオホール』は、毎週金曜日の午後 8 時から 1 時間放送された最終回、1961 年 11 月 24 日「滝廉太郎歌曲集」の冒頭部分である。本番の歌曲集の方は割愛したが、冒頭のアナウンスと、昭和 30 年代初頭の「S 盤アワー」時代に度々登場し、大ヒットしたペレス・プラード楽団のイントロ音楽を聴くだけで、当時の雰囲気リアルに伝わってくる。AM ステレオ放送はこの年を境に順次 FM ステレオに移行する。

### 19. チャイコフスキー ピアノ協奏曲第 1 番:エミール・ギレリス/ライナー(国産初のステレオ LP)

■BMG ファンハウス ■SLS-2001

1958(昭和 33)年 8 月に日本ビクターから発売された国産第 1 号のステレオ LP(SLS-2001)。日本ビクターが独自に開発し、ステレオ LP の標準となった 45/45 方式で録音されている。ピアノはロシアのエミール・ギレリス、フリッツ・ライナー指揮、シカゴ交響楽団の演奏。2 枚同時に発売され、もう 1 枚はヤッシャ・ハイフェッツのヴァイオリン、シャルル・ミュンシュ指揮、ボストン交響楽団によるベートーベンの「ヴァイオリン協奏曲二長調」だった(SLS-2002)。

定価は当時 1 枚 2,800 円。同時期、モノラル LP は 2,300 円から 1,900 円に値下げされている。大卒の初任給がほぼ 1 万円の時代である。

## 20. ワグナー ラインの黄金第 4 場：ショルティ/ウィーンフィル（ステレオ LP 時代の名録音）

■ユニバーサルミュージック ■SLB-17~9

1958 年、英デッカ（London）がその最新の録音技術でチャレンジしたワグナーの「ラインの黄金」のスタジオ録音は、翌 1959 年に LP として発売されるや、その優れた録音と舞台さながらの臨場感で多くのオーディオ・ファンやオペラファンを魅了した。特にここに収められた第 4 場で雷神ドンナーがハンマーを岩に叩き付ける場面は、当時再生装置のチェックやデモ用として使われた。

## 21. マーラー 交響曲第 2 番：ショルティ/ロンドン（ドルビーNR 録音）

■ユニバーサルミュージック ■SLB-17-9

アナログ録音のマスターテープは、モノラル録音時代から 6mm 幅の磁気テープが使われている。ステレオ録音に同じテープを使うとトラック幅は半分以下になるため、S/N が悪くなるのはやむをえない。英国デッカ（London）レコードでは、マスターテープの雑音レベルがレコードの音質に大きく関わることから、テープ録音での雑音低減を Dr. Dolby の開発した新方式を用いて共同で実験を行った。オーディオ帯域を 4 分割して圧縮伸長する画期的なもので、後にドルビー A タイプといわれる、プロ用のノイズリダクション方式である。この「復活」のオリジナル録音はそうした新しい方式を使って 1967 年に収録した初期のもので、曲中のピアノシモ部分では、当時の古いタイプの磁気テープでは得られない S/N 比が確保され、デジタル時代の今日聴いても支障の無い音のクオリティを保っている。

## 22. エル・チョクロ：キンテート・レアル（世界初のダイレクトカッティング）

■日本コロムビア ■45PX-2007

1960 年代後半から 1970 年代初めにかけて LP の付加価値の向上や音質改善を目的として様々な改善が行われていた。4 チャンネルやダイレクトカッティングやデジタル録音がその代表的な例である。ダイレクトカッティングは、磁気録音の導入によって生じた変調雑音の発生を抑制しようということで、1969 年 2 月 5 日に来日中のアルゼンチンタンゴの名手達「キンテート・レアル」を当時の赤坂のコロムビアスタジオに招き行なわれた。第 2 スタジオで緊張感に満ちた演奏が行なわれ、その信号は階下の 2 台のカッティングマシンに接続され、30cm45 回転のラッカー盤へのカッティングが行なわれた。当時、編集のできる変調雑音の少ない録音機の実用化が求められ、後のデジタル録音の実用化につながった。本 CD には、当時のダイレクトカッティング盤からの良好な条件での収録が困難であったため、本番時にアナログテープに同時収録された録音を使用している。

## 23. 雨にぬれても：カウントバッファロービッグバンド

■東芝 EMI ■LF-90001



1960年代後半にはLPとその再生機の付加価値を増すため、マトリックス方式の4チャンネルLPとその再生機が導入され、スタジオでも4チャンネル録音が行われた。その代表作が行方洋一氏によるこの録音である。故鈴木宏昌（通称コルゲン）がバート・バカラックの曲を4ビートにアレンジし、当時の東芝EMIの高音質アナログテストレコード（後のプロユースシリーズ）のイントロに利用され一世を風靡したカウントバッファローによる演奏だ。元はマトリックス4チャンネル（QS）方式のサラウンドソースとして制作したもので、オリジナルは米アンペックス社製の8トラック録音機で録音された模様。その当時の東芝EMIのスタジオのミキシングボード（調整卓）はタールでしっかり固めたハイブリッドアンプモジュールを使用した米API社製で音の抜けの良さはバツグンであった。このボード内のイコライザは、最近までビンテージEQとして各社のスタジオで活躍した。

#### 24. 時計屋の店先（バイノーラル）

##### ■ビクターエンタテインメント■VIBN-1

60年代も後半になると、レコードマンはどんなソフトを作るか、試行錯誤を繰り返す最中であった。ビクターのハード陣が開発したという、ダミーヘッドマイクが青山スタジオに持ち込まれた。これで録音しヘッドフォンで聴くと方向感、遠近感が出るという。1976年に今は無き16チャンネル・アナログ録音機を三鷹市民会館ホールに持ち込み、音楽にはワンポイント方式で2チャンネルだけ、あとのチャンネルはあちこちから集めた古時計の音に使い、後日2チャンネルにミックスダウンした。音楽ソースのヘッドフォン受聴、2チャンネル全方位立体が目的であるが、ダミーヘッドのマルチ録音へのトライと共に、当時ブームであった生録用のバイノーラル機器や、スピーカー受聴で効果を出すプロセッサの開発が行われていた時期の貴重な音源である。

#### 25. アラベスク第1番：富田 勲（シンセサイザー）

##### ■BMG ファンハウス■SRA-2974

シーケンサーを使って、モーグ他のシンセサイザーに単音の旋律を演奏させ録音を重ねてゆく作業は、気の遠くなる作業に違いなかったはずだが、それは新しい音楽の誕生の瞬間でもあった。このシンセサイザー音楽のレコードは、ワルター・カーロスの「スイッチド・オン・バッハ」で皆の知るところになった。その後ともすれば単調で音楽性に欠けがちであったシンセサイザー音楽に新しい息吹と音楽性を吹き込んだのが富田勲氏であった。従来楽器の模倣では無くシンセサイザーで無ければ出せない音を作り、このドビュッシーの作品ではアルペジオの間をつなぐメロディーの躍動感を感じることができる。

#### 26. モーツァルト弦楽四重奏曲第17番：スメタナ弦楽四重奏団（世界初PCM録音LP）

##### ■日本コロムビア■C-8501-N

今から40年以上前の1972年4月に行われた世界最初の本格的なデジタル録音。東京の青山タワーホールに日本コロムビアがNHK技術研究所の技術協力を得て開発したPCMデジタル録音機を持ち込み、折から訪日中のチェコの至宝スメタナ弦楽四重奏団の演奏を、独ゼンハイザー社コンデンサーマイクによりワンポイント（会場の響きも別個に収録した4チャンネル）収録。標本

化周波数 47.25kHz、量子化ビット数 13 ビットは今では物足りない数値ではあるが、実際の弦楽四重奏の音量またはそれ以下の音量で聴く場合には十分なダイナミックレンジが得られ、デジタル録音の最大の特徴であるジッターの無さが、練習と録音に立ち会った評論家をしてスタミナクアルテットと言わしめたスメタナ弦楽四重奏団の緻密なアンサンブルの魅力を引き出している。この録音で始まったスメタナ弦楽四重奏団とのデジタル録音は、その後チェコを中心に 1980 年代半ばの引退まで続きベートーベン全曲他幾多の名作が生まれた。

## 27. テクノポリス：イエロー・マジック・オーケストラ (コンピュータによるミキシング制御)

■アルファミュージック ■ALR-6022

イエロー・マジック・オーケストラは、1978 年に細野晴臣、高橋幸宏、坂本龍一によって結成され、1983 年に解散されるまでの 5 年間、シンセサイザーとコンピュータを組み合わせた新しい音楽の分野で日本そして世界を席卷した。1970 年代末は、コンピュータによるミキシング制御の黎明期にあり、苦労を重ねたこの録音はその代表作と言えよう。それは、音楽が新しい音、新しい表現を求めてミキシングにまで変化を求めた時期だった。この動きは、後にデジタルマルチトラック録音、コンピュータによる信号も含めたミキシングへとつながった。

### 《CD の誕生》

## 28. さらばシベリア鉄道：大瀧詠一 (世界初の CD)

■ソニー・ミュージックエンタテインメント ■35TH-1

1982 年 10 月、世界に先駆け日本で CD と CD プレーヤーが発売され、CD 時代の到来を告げた。そのとき発売された数十枚のアルバムの中で国内アルバムの第 1 号を飾ったのが、大瀧詠一の『A LONG VACATION』であった。この CD は通算 100 万枚以上を売り上げるヒット作品ともなっている。ここには、そのアルバムの中から「さらばシベリア鉄道」の抜粋が収められている。

## 29. チャイコフスキー 序曲 1812 年：カンゼル/シンシナティ交響楽団(デジタル時代の名録音)

■TERARC ■DG10041

デジタル録音が導入されて間もない 1978 年、テラークが曲中の大砲の音を実の先込め大砲を用いて録音したことで話題を呼んだものである。当時はステレオ LP としてリリースされ、カートリッジのトレース能力のチェックに最適なレコードとなっていた。この歴史的なレコード以外にもテラークは優れた録音のレコードをリリースし一躍オーディオ・レーベルとして有名となった。やがて CD の時代に入ると、同社は多くの音源を CD 化し、さらに DSD マスタリングにより SA-CD としても復刻されている。

## 30. マーラー 交響曲第 4 番：インバル/フランクフルト RSO (デジタル時代の名録音)

■日本コロムビア ■C37-7952

この録音は、デジタル録音の草分け的エンジニア穴澤健明氏が手がけ、当時不可能と考えられていたベートーベン以降のオーケストラ作品のワンポイント録音に奇跡的に成功した話題作である。当時、映画評論家でオーディオにも一家言持つ故荻昌弘氏をして「ディスクのミューズのほ

ほえみ」と言わしめた名録音。1986年度レコード芸術録音賞受賞。穴澤氏は、録音会場のフランクフルトのアルテオパーでの最適マイク位置の搜索を1984年春に開始し、この会場で行なわれたコンサートで実験を重ねた後、1985年10月10日、11日のエリアフ・インバルによるこのマーラーの4番の交響曲の録音でワンポイント録音が実現した。デンマークB&K社の「Type4006（プレッシャー型）」2本を使用し、トランスや調整卓等は一切使用せず、単純なアンプを等価約18ビットの精度を持つ録音機に直接接続した。この録音はドイツで「ライフアウナーメットシステム」(編集付ライブ録音)として話題となりその後の各社のオーケストラ録音に積極的に採用された。

### 31. マーラー 少年の魔法の角笛:フィッシャー・ディースカウ/バレンボイム(世界初 20ビット録音)

■ソニー・ミュージックエンタテインメント ■CSCR-8010

1989年4月、マーラーの管弦楽伴奏付き歌曲集「少年の魔法の角笛」がディースカウとバレンボイムの指揮、ベルリンフィルハーモニーの共演で録音された。このとき、録音には20ビットレコーダーが世界で初めて用いられた。以降、録音やマスタリングの過程でより高音質を求めてハイビット処理が取り入れられるようになる。このディスクはまさにその端緒となったものである。

### 32. デイス・ヒア:トニー・ウィリアムス・トリオ(世界初のDSD録音)

■ソニー・ミュージックエンタテインメント ■SRCS-8212

世界初のDSDレコーディングが1996年9月24日、25日、ソニー・ミュージックエンタテインメント信濃町スタジオで行われた。演奏は偉大なるドラマー、トニー・ウィリアムスが率いるトニー・ウィリアムス・トリオ。アルバム名『ヤング・アット・ハート』他11曲が収められ、SA-CD、CD両方が発売された。残念ながらこのアルバムがトニー・ウィリアムスの最後の録音となった。このアルバムの10曲目に「デイス・ヒア」が収められている。

## 《日本プロ音楽録音賞》

\*33～39「日本オーディオ協会 50周年記念 CD より抜粋」(文責：編集委員会)

## 33. ドヴォルザーク/交響曲第9番：ノイマン/チェコ・フィル (第1回)

■日本コロムビア ■coco-75968

1993年12月11～12日、チェコ・プラハの芸術家の家～ドヴォルザーク・ホール～で開催された「ドヴォルザーク/交響曲第9番(新世界)」初演100周年コンサートでのライブ・レコーディング。当時、新たに開発された20ビット録音機による収録で、CDにはディザ処理で16ビットに変換されるMS(マスター・ソニック)の黎明期の作品。マイク・アレンジはB&Kマイク2本のセッティングで、以後、ワンポイント・シリーズとして定着する。

(斎藤宏嗣)

## 34. Because：白鳥英美子 (第2回)

■キングレコード ■KICS-483

1995年に発売されたアルバム『Dear～Beatles number collection/白鳥英美子』の冒頭にパックされている。サブ・タイトルが示すように、このアルバムは、白鳥英美子が幼い頃より口ずさんできたビートルズ・ナンバーを独自の世界に反映した力作である。収録は、東京関口台のキングレコード第1スタジオおよび第2スタジオ、キングYKスタジオ、リトル・バッハ・スタジオで、録音機はアナログ・マルチレコーダー。

(斎藤宏嗣)

## 35. 「バケーション」：飯島真理 (第3回)

■イーストウエスト・ジャパン ■AMCM-4260

1996年に発売されたアルバム『Good Medicine』に受賞曲「バケーション」がパックされている。このアルバムは、すべて飯島真理によって書き下された自作自演作品である。マスター・レコーディングは、ハリウッドのウェストレーク・スタジオ及びツウイン・サンズ・レコーディング・スタジオで、ミックスダウンもアメリカで処理されている。また、ヴォーカルのバックを支えるミュージシャンも全てウエスト・コーストのメンバーでかため、本場のポップなテイストがたっぷりと盛り込まれている。

(斎藤宏嗣)

## 36. Edge of Sky：吉川忠英 (第4回)

■バップ ■VPCC-80503

受賞曲“Edge of Sky”は、1997年制作のアルバム『にじ/吉川忠英&井上鑑』の冒頭を飾るナンバーである。アコースティック・ギター界の鉄人と呼ばれる吉川忠英とキーボード界の歌人～井上鑑のデュオによるこのアルバムは、SSPPレーベルならではのワイド・レンジ、高解像度、高密度をベースに、ダイナミックなサウンドを綴っている。

(斎藤宏嗣)

## 37. 中田喜直/霧と話した：中丸三千絵 (第5回)

■東芝EMI ■TOCE-9594

本アルバムは、イギリスのアビーロード・スタジオ No1 で収録されている。このスタジオは、

あのビートルズのレコーディングで有名だが、それは、小型の No3~4 スタジオ。No1 スタジオは 1930 年初頭に開設されたオーケストラの収録も可能な大型スタジオで、響き過ぎず明瞭な音響空間に定評がある。受賞曲は、名門のフィルハーモニア管弦楽団に支えられた、伸びやかな中丸三千絵の独唱がすっきりと浮き上がる、聴感に穏やかなパターン。(斎藤宏嗣)

**38. 「芥川也寸志の芸術 1 管弦楽作品集」より〈舞踏組曲：蜘蛛の糸〉：本名徹次（第 6 回）**

■キングレコード ■KICC-246

我が国を代表する現代作曲家。芥川也寸志の没後 10 周年を記念したアルバム『芥川也寸志の芸術-1/管弦楽作品集』に、受賞曲の「舞踏組曲・蜘蛛の糸」(1968 年作曲)がバックされている。原作は、芥川龍之介の小説によるバレエ音楽で、後に管弦楽のための舞踏組曲にまとめられている。収録は 1998 年 8 月 25~27 日に東京・IMA ホール、演奏は本名徹次(指揮)日本フィルハーモニー交響楽団である。(斎藤宏嗣)

**39. 「Illusion」より Turning of the Dream：本田雅人（第 7 回）**

■ビクターエンタテインメント ■VICJ-60553

受賞曲は、久々に登場したジャズ史上に記録されるであろう秀作アルバム『Illusion/本田雅人』の最終トラックに収められている。リーダー本田雅人のアルト・サクソに人気グループ“ポンタ・ボックス”の面々〜ドラムスの村上“ポンタ”秀一、アコースティック・ピアノの佐山雅弘、アコースティック・ベースのバカボン鈴木がサポートする。収録は、1999 年 11 月 8 日の青山のビクター・スタジオ 302st である。録音はアナログ 24ch、テープ:76 cm/sec・2ch のモンスター・マシンでマスタリング、カッティングはレーザー K2 カッティング方式。(斎藤宏嗣)

\*40~50:「日本プロ音楽録音賞報告書 受賞者コメントより抜粋」(文責:編集委員会)

**40. 「パーカッション・ミュージアム | ポレロ/展覧会の絵」より「道化師の朝の歌」(第 8 回)**

■キングレコード ■KICC-344

■受賞者コメント:須賀孝男/キング関口台スタジオ

パーカッションのみによるユニークなアレンジで演奏されたクラシックの名曲を表現していく上で、全体としての音場感や各楽器の音色、響きをより魅力的に捉える事を主眼としました。特に奥行感やアレンジを大切にしたい音楽としてのバランスに留意しています。録音フォーマットとして 192k Hz/24bit を選択し 2ch ダイレクト録音としたことも、その一助になったのではないかと思います。

各楽器の音色、同じ楽器であっても演奏者による繊細な表現の違いを自然な感じで、またパルツブな音の楽器が多い事が想像出来ましたので、音量感、質感が損なわれないように捕えることに気を付けました。

**41. 「ポリビアの朝」より「Fantasma II」沖 仁（第 9 回）**

■Wrecker Company (自主制作盤) ■WCJO-0005

■受賞者コメント：林原正明/クリケットスタジオ

自主制作作品での今回の受賞は大きな自信を与えてくれたのと同時に、これからも色々な作品に携わり、より良い録音が出来ると一層の意欲を湧かせてくれました。

自主制作ということで種々の制約もありましたが逆に自由度の高い部分もあり、その中で簡潔で効率の良い方法を選択、実践することに努めました。事前の打ち合わせをスタジオで行い、参考となる音源を試聴しながら本作のイメージを話しあうなど、アーティストであり制作者である沖さんが録音当日、より演奏に集中出来る事を第一にプランニングを進めました。

録音に関しては本作品に限ったことではありませんが制作者の意図、楽曲や演奏の素晴らしさ等が損なわれず聞き手に届くことを念頭に、与えられた条件の中で最大限の効果が得られるように作業を行いました。最終的に非常に的の絞れた作品に仕上がったと思います。それが結果として今回の受賞につながったのだと思っています。

42. 「Wave～ジョビンへのオマージュ」より「波」

チェロ：長谷川陽子/ギター：福田進一（第10回）

■ビクターエンタテインメント ■VICC-60337

■受賞者コメント：奥原秀明/ビクターエンタテインメント

「Wave～ジョビンへのオマージュ」というアルバムは、長谷川陽子と福田進一という、クラシック界でも名前の知られたお二人のある意味「異色デュオ」の作品ですが、出音の違いによるレベルバランスや、比較的再生帯域の近寄った楽器同士の表現ということで、なかなか事前にレコーディングのイメージが沸かない苦勞もありました。ボサノヴァというスタイルを考え、ブースに隔離せずワンフロアで演奏してもらうことを第一にレコーディングした作品で、「スタジオの響きくささないように」、「単にポップス的なサウンドではなく、ある程度音場・演奏のダイナミクスを自然に表現したい」をポイントに、ホール録音と同様な 2ch 同録をしています。ただし、スタジオ独特の反射音を嫌い、ホール録音でみられるようなメイン（オフ）マイクで音場を表現することはせず、オンマイクとその指向性で今回は表現してみました。今回その意図を評価していただいたこと、大変満足しております。

今回の審査総評でお話があったように、アコースティックもの/インストものは、サウンドの性格上、録音賞ノミネートに上がりやすい状況の中、さらに唄もの/バンドものの応募/参加でこの録音賞を盛り上げていくことが今後の課題でもあると実感しており、そういった意味を含め、自分のまわりにいる若いエンジニアともども盛り上げていきたいと感じております。

43. 「Fankacoustics」より「VIEWS」：角松敏生（第11回）

■BMG ファンハウス ■BVCR18032～33

■受賞者コメント：川澄伸一/ミキサーズラボ

毎回応募させていただいていますが、なかなかハードルが高くて・・・そういった意味でも非常に嬉しく思っております。

角松氏と仕事をさせていただくようになってから、もうかれこれ 16 年にもなります。もちろん最初はアシスタントとして数多くのセッションに参加させていただきました。その後もエンジニ

アとしてたくさんのアルバムを録音させていただき、ここ1、2年でやっとMIXまで任せていただけるようになりました。実にいろんなことを勉強させていただいてきましたが、今回のアルバム「Fankacoustics」は、まさにこれまでの集大成とも言うべき内容です。

曲数も多くて、なかなか過酷なレコーディングではありましたが、自分でも良い作品になったと思っています。今回、その中の1曲が優秀賞をいただけたということが私自身、そして携わったすべての人にとって大きな励みになると思います。本当にありがとうございました。

最後にこのアルバムを聴いていただいたすべての人に、ありがとうございました。

#### 44. CHECKING DVD BY MUSIC「シェエラザード」オーディオ交響組曲」より

##### 「第一楽章 セレクション」

齋藤ネコ 指揮「シェエラザード」：シェエラザード・フィルハーモニー交響楽団（第12回）

■ミキサーズラボ ■MLAS-1001~1002

■受賞者コメント：菊地 功/ミキサーズラボ

今回プロ音楽録音賞に応募した作品は、「CHECKING DVD BY MUSIC /シェエラザード オーディオ交響組曲」という、なんとも厳しいタイトルのDVDでした。これは、信号を使わずにすべて音楽を聴きながら5.1chの再生環境を調整しようとするもので、かなり斬新で画期的なディスクであると自負しています。審査に提出したものは、ディスク2に収録されている鑑賞用です。

サラウンド環境をオーケストラを使ってチェックするわけですから、チェックの内容によってはパート単体の音が必要です。つまりヴァイオリンパートのみを使う場合にヴィオラやチェロの「かぶり」は禁物なのです。この「かぶり」の無い音が今回のキーワードになり、重要なコンセプトになった訳です。アレンジャーの齋藤ネコ氏が自宅でオケパート全てを打ち込み、リズムボックスを3種類作り、演奏者たちが違和感の無いように準備をしました。そのガイドを演奏者は自分たちのパート以外の音を聴き、自分のパートに合ったリズムボックスを聞きながら、全てのパートを別々に集めて録音は進められました。収録は、ウエストサイドAスタジオで行われ、全パート及びアンビエンスを含め100chになろうかという大掛かりな録音になりました。エンジニアの内沼はオーケストラの融合一体感を出すために、アンビエンスマイクを自らの経験値で遅らせて見事なサウンドに仕上げました。

#### 45. 「after six」より「after six pm」：paris match（第13回）

■ビクターエンタテインメント ■VICL-61882

■受賞者コメント：谷田 茂/ビクターエンタテインメント

前回と今回で2年連続してパリスマッチの作品が選ばれたことに、驚きと喜びを隠し切れません。特に今回は最優秀賞ということでうれしさもひとしおです。自分がこれまでやってきたことが単なる自己満足だけではなく、周りの人にも認めていただけたということは、これからの音楽制作においても大きな自信につながります。

今回の楽曲”After six pm”は2分30秒と短く、アルバムのなかでもイントロダクション的な役割の曲です。おのおのの楽器をフィーチャーして、パリスマッチのもつアーバンな雰囲気は大

事にしつつ、バンドとしての一体感を出すことを念頭において作業をしました。

2ch というステレオ空間のなかで、パンニングによってひとつひとつの楽器を立てて、エコーで広がったそれぞれの楽器の隙間を埋めて、うまく全体を表現できたと自負しております。

賞はエンジニアリングだけではなく楽曲、アレンジが良くなければ頂けなかったと思います。これからもいい作品に出会える、そこに自分がいれるように日々努力し頑張ります。

#### 46. 「ファイナル・オーケストラ・スペシャル・ライブ オーボエ協奏曲集」より

「アルビノーニ：オーボエ協奏曲 変ロ長調 Op7-3 第1楽章：アレグロ」

宮本文昭、東京都交響楽団（第14回）

■Sony Music Japan International Inc. ■SICC-10045

■受賞者コメント：鈴木浩二/ソニー・ミュージックコミュニケーションズ

この作品はサントリーホールで行われた、宮本文昭さんのアルビノーニ作曲のオーボエコンチエルトのライブ録音です。宮本さんはこの録音後の春に演奏家の引退を決めておられ、クラシック音楽の最後の録音となりました。宮本さんをはじめスタッフ一同、いつもとは何か違う思いを感じ、私もよい音楽よい録音を残したいと強く感じました。

録音のコンセプトとしましては、サントリーホールの空間や臨場感を大切に、宮本さんの表現する音楽のリアリティーとオーボエの輪郭が感じるよう臨みました。

録音システムは DSD-SONOMA-24ch でマルチ録音し、DSD-2ch にミックスしました。空間の繊細な表現は、DSD はとても優れていて、ホール録音には欠かせられない録音機です。そして SA-CD と CD 用にマスタリングしハイブリッド使用でマスターを作製しました。

オーディオバランス的には少しオーボエが前に出て大きく感じられますが、ソリストの繊細な表現とオーボエのリアリティーを大切にしたバランスで、音楽としては違和感のない、そしてわくわくするサウンドにミックスできたと思います。

頂いたこの賞を励みに、またよい音楽よい録音の作品に携われるよう、精進努力して参りたいと思います。

#### 47. 「PLEIADES」より「FRAME FOR THE BLUES」：Eric Miyashiro（第15回）

■ヴィレッジ ミュージック ■VRCL-3048

■受賞者コメント：篠筈 孝/ソニー・ミュージックコミュニケーションズ

奥行き感、空気感、ライブ感をリアルに感じるサウンドを作るというコンセプトのもと、このビッグバンドレコーディングは行なわれました。これに見合う録音機材の選定として SONOMA24chDSD をマルチレコーダ、SONOMA8chDSD をマスターレコーダという組合せとしました。空気感を得る事では DSD フォーマットは最高に良い機材です。そして決定的に奥行き感を出せた理由は、プラスセクションをひな壇演奏とし、ワンポイントをメインに録音した事でした。このときのセクションのバランスは、当然ミュージシャンが表現しなければ成り立たない手法です。そしてこれに見合うアンビエントを得ることができるスタジオも必要です。本当に恵まれた環境の中での録音でした。

第一回日本プロ音楽録音賞開催時、アコースティック部門において最優秀賞を受賞した先輩を



見て、このようなエンジニアにいつかなりたい。当時 22 歳の私は、そのようにあこがれていた事を思い出します。そしてこの度、15 回目にしてアコースティック部門の最優秀賞を手に出れたことが信じられません。今まで、そして現在と、私の周囲には良い影響を与えてくれる素晴らしい人たちの存在がありました。そして、レコーディングの醍醐味であるアコースティック録音に携わることができる事にも感謝しています。そして、まだまだもっと多くの人が感動していただけるような音作りを目指し、精進していきたいと思います。

#### 48. 「Jazz Impression」より「Meteor」：渡辺香津美（第 16 回）

■イーストワークスエンタテインメント ■EWSA0163

■受賞者コメント：鈴木浩二/ソニー・ミュージックコミュニケーションズ

このアルバム「Jazz Impression」は渡辺香津美、待望のジャズアルバムです。そしてこの曲「Meteor」は、渡辺香津美(g)、則竹裕之(ds)、井上陽介(b)、本田雅人(ss)というシンプルで豪華メンバーによる、ドンカマを使用しない、同時録音で録音された曲です。

全ての楽器にマイクを使つての録音で、立体感や奥行き感を表現するために、マイクの種類、楽器との距離に神経を注ぎ、頭の中でシミュレーションをして臨みました。

今回の音作りに対する私のテーマは、このすばらしいミュージシャンのエネルギーをストレートにスピーカーから表現するということでした。当たり前ですが、最初のテイクから録り逃さないように緊張感を持って、また、JAZZMUSIC なので何が起こるかわからない、不安と楽しみの中、録音しました。

SA-CD ハイブリッドでの発売でしたので、SONOMA (DSD マルチ)に録音、そして DSD にミックスし、「迫力のあるリアルなサウンド」を作りました。

今回特に実感しましたのは、「よい演奏」がない限り「よい録音」は成り立たないということです。今回、この賞を頂けたのは、素晴らしいミュージシャンの方々のお蔭だとつくづく思いました。この作品に関わられた皆様に感謝申し上げます。これを励みに今後とも、よい音楽 よい録音の作品に携われるよう、努力して行きたいと思います。

#### 49. 「BIG BAND SOUND～甦るビッグバンドステージ～」より「オール・オブ・ミー」

角田 健ービッグバンド（第 17 回）

■ワーナーミュージック・ジャパン ■WPCL-10853

■受賞者のコメント：菊地 功/ミキサーズラボ

今回の作品は、ビッグバンド（角田健ービッグバンド）作品で応募しました。3 年前にも応募したものの、第 2 弾ということになります。前回は、DVD オーディオ-5.1ch でしたが、今回は SA-CD-2ch というカテゴリーです。DVD オーディオと SA-CD というハイクオリティー音楽の双璧に携わり非常に面白い経験をしました。どちらが優れているとか素晴らしいとかというよりも、PCM と DSD の持っている特性違いが音に現れています。音の差は聴く環境によっても違うのですが、SA-CD についてはハイエンドまで伸びたサウンド、特に今回の作品で言えばトランペットのハイトーンからそのリバーブについては一聴の価値があります。是非皆様も体験し実感していただけたら、と思います。

最後に、この日本プロ音楽録音賞に携わってご尽力された関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

50. 「マーラー：交響曲 第2番「復活」より「5 Im Tempo des Scherzos」

エリアフ・インバル指揮 東京都交響楽団（第18回）

■オクタヴィア・レコード ■OVCL-00434

■受賞者コメント：江崎友淑/オクタヴィア・レコード

今回のマーラーの録音については、たった1回のコンサート、そして当日の短いリハーサルのみで作りました。テイクが少なかった為、所々納得のいかない点も多いのですが、録音当日に舞台上で繰り広げられた素晴らしい演奏の様子が生々しく収録されていると思います。そこからは現在充実の極みにあるインバルと都響の温度感の高い演奏が聴き取れます。現在の日本のオーケストラの技術水準の高さ、また緻密さは諸外国の一流団体を凌ぐものがあり、おそらくこの録音もそれらに助けられた賜物であると確信しております。最後にもう一度、この賞を頂くにあたりまして、故斉藤先生、当日の演奏者や関係御各位、また当日担当した録音スタッフの皆に心からの感謝を申し上げたいと思います。

（お詫びと訂正）

22. このトラックのタイトルにキントーレ・リアルとありますが、キンテート・リアルに訂正。
27. このトラックのタイトルに「デジタルマルチトラック録音」という表記がありますが、この録音は「コンピュータによるミキシング制御を行った録音」に訂正。
42. このトラックのCDタイトルに「波」：長谷川京子、福田進一（第10回）とありますが、長谷川京子を長谷川陽子に訂正。

以上の箇所を訂正し、謹んでお詫び申し上げます。